

II 各教科の正答率、問題の内容及び所見・解説

1 国語

(1) 正答率

問題	配点	正答		一部正答		誤答		無答		通過率 率 = $\frac{\text{得点計}}{\text{人数} \times \text{配点}} (\%)$	
		数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)		
1	問 1	4	264	64.7	0	0.0	144	35.3	0	0.0	64.7
	問 2	6	203	49.8	117	28.7	58	14.2	30	7.4	67.3
	問 3	4	366	89.7	0	0.0	42	10.3	0	0.0	89.7
	問 4	7	147	36.0	170	41.7	51	12.5	40	9.8	60.0
	問 5	5	197	48.3	68	16.7	140	34.3	3	0.7	56.9
2	問 1 (1)	2	319	78.2	0	0.0	71	17.4	18	4.4	78.2
	問 1 (2)	2	399	97.8	0	0.0	4	1.0	5	1.2	97.8
	問 1 (3)	2	339	83.1	0	0.0	65	15.9	4	1.0	83.1
	問 1 (4)	2	264	64.7	0	0.0	108	26.5	36	8.8	64.7
	問 1 (5)	2	62	15.2	0	0.0	216	52.9	130	31.9	15.2
	問 2	3	54	13.2	1	0.2	316	77.5	37	9.1	13.4
	問 3	3	346	84.8	0	0.0	60	14.7	2	0.5	84.8
	問 4 (1)	3	282	69.1	0	0.0	110	27.0	16	3.9	69.1
	問 4 (2)	2	310	76.0	0	0.0	97	23.8	1	0.2	76.0
	問 4 (3)	3	293	71.8	0	0.0	114	27.9	1	0.2	71.8
3	問 1	4	334	81.9	0	0.0	73	17.9	1	0.2	81.9
	問 2	5	212	52.0	0	0.0	194	47.5	2	0.5	52.0
	問 3	6	99	24.3	216	52.9	56	13.7	37	9.1	53.5
	問 4	4	195	47.8	0	0.0	205	50.2	8	2.0	47.8
	問 5	7	136	33.3	129	31.6	46	11.3	97	23.8	52.0
4	問 1	3	101	24.8	104	25.5	147	36.0	56	13.7	38.4
	問 2	3	177	43.4	0	0.0	226	55.4	5	1.2	43.4
	問 3	3	322	78.9	4	1.0	67	16.4	15	3.7	79.5
	問 4	3	278	68.1	0	0.0	126	30.9	4	1.0	68.1
5	12	36	8.8	332	81.4	20	4.9	20	4.9	58.6	

(小数第2位を四捨五入しているため、%の合計が100にならない場合がある。)

(2) 問題の内容

- 1 出典は青山美智子著『お探し物は図書室まで』である。問題文として使用した箇所は、就職もアルバイトもうまくいかない浩弥が、①図書館司書である小町さんと『進化の記録』をめくりやりとりをする場面、②友人の征太郎から小説家デビューの知らせを受ける場面、③タイムカプセルを開いてかつての自分の「願い」に気づく場面の3場面である。いずれも本章の主人公である浩弥の視点から描かれており、将来を思い悩む浩弥が、自らのこれからの生き方を見出していくという内容は、受検生にとっても十分に共感し理解できるものである。心情変化が素直に表現されているこの文章は、受検生（中学生）の国語の学力を多角的に判断する資料文として適切だと考えられる。
- 2 漢字の読み書き、基本的な文法の知識（品詞の分類）と語彙力、話し合いの場面における発言の内容や話題になっている具体的な内容について、および四字熟語の構成について解答する問題である。
- 3 出典は佐藤岳詩著『「倫理の問題」とは何か メタ倫理学から考える』である。問題文として使用した箇所は、倫理の問題に正解はあるか、という問いに対して、著者が「ある」「ない」の双方の立場から倫理の問題における「正解」について論じた部分である。二項対立で論じられたこの文章は、受検生にとっても著者の思考のプロセスを追いやすく、多角的な見方を通して考えを深めることができる文章と考えられる。

- 4 出典は源俊頼『俊頼髓脳』である。問題文として採用した箇所は、「野守の鏡」に関する故事の部分である。全体として平易な表現で記述され、物語としても一貫した流れで展開しており、平素の古典学習の成果をみる資料文として適切だと考えられる。
- 5 資料は、文化庁の令和2年度「国語に関する世論調査」における「気になる言葉」の項目をもとに作成されたグラフである。全国の16歳以上の個人を対象にした調査資料をもとに、「コミュニケーションを図るときに気をつけること」についての自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験をふまえ、展開を工夫して書く力をみようとした。

(3) 所見・解説

- 1 文学的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 文章の内容をとらえ、登場人物の心情を読み取る力をみる問題である。ここでは、傍線部①の7行前「自然淘汰。環境に適応できない者は滅びる。」以降の描写に着目する。「俺自身にたいした力がなくなつて、……いけるのに。」とあることから、浩弥は自身を「淘汰される側」と認識していることがわかる。その上で「蹴落とされた側の痛みばかりがリアルに迫ってくる。」とあるように、浩弥は「蹴落とされる側」すなわちウォレスの側に自分自身を重ね合わせていることが読み取れる。この読み取りに合致する選択肢はウである。

問2 登場人物の心情を読み取り、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。ここでは、傍線部②の9行前「でも、少なくとも……」以降の描写に着目する。小町さんの「そしてウォレスについて、いろいろなことを考えている。それってじゅうぶんに、この世界にウォレスの生きる場所を作ったということじゃない？」という言葉を引きかけに、浩弥は「誰かが誰かを想う。それが居場所を作るとのこと……？」と考えるようになる。その上で、小町さんの言葉「その背後には、どれだけたくさん名も残さぬ偉大な人々がいただろうね。」という言葉を受けて、浩弥が「名も残さぬ人々のことを想った。」(傍線部②)とつながる構造になっている。こうした点をふまえて、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問3 文章中の描写から、登場人物の心情とその理由を読み取る力をみる問題である。浩弥の涙があふれて止まらなかった理由は、征太郎が小説家デビューを決めたことにある。その上で、「俺の……俺の小さなひとことを、そこまで大事にしてくれてたなんて。」ということが、「涙があふれて止まらなかった」理由となる。この読み取りに合致する選択肢はイである。

問4 文章の内容から登場人物の心情の変化を読み取り、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。ここでは、傍線部④の17行前「俺も思っていた。」以降の描写に着目する。浩弥の当初の心情を読み取ることができる箇所としては、「俺も思っていた。俺に絵の才能なんてあるわけない、普通に就職なんてできるはずない。でもそのことが、どれだけ可能性を狭めてきたんだろう？」と、これまでの自分を振り返る部分や、自分を取り巻く環境について、「俺を認めてくれない世間や、ブラックな企業がはびこる社会が悪いって、被害者ぶって。」と振り返っている部分などがある。

この浩弥の心情が変化するきっかけになるのは、タイムカプセルの紙に書かれていた「人の心に残るイラストを描く」という言葉である。これを見て、浩弥は「でも俺の根っこの、最初の願いはこういうことだったじゃないか」と気づき、傍線部④「今からでも、遅くないよな。」と思うようになる。ここで「今からでも、遅くない」と浩弥が考えたのは「人の心に残るイラストを描く」ことであり、「誰かの人生の中で心に残るような絵が一枚でも描けたら。」というように表現されている。これらの点から、浩弥の変化後の心情を読み取ることができる。

こうした内容をふまえて、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問5 表現上の工夫に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。正答はアとオである。アは、「小町さんが語り手となって展開する場面の双方があり」が適切ではない。資料文は一貫して浩弥が語り手となっており、小町さんが語り手となって展開する場面はない。オは、「連用形で文を切ることで」が適切ではない。ここは本来、「どういう意味だろうと考えてしまうような気がするし、でも理屈じゃなくすぐくわかるような気もする。」となる箇所であり、本文の表現は「気がする」の部分を省略したものである。省略された「気」につながるのは連体形であるため、ここでは推定の助動詞「ようだ」の連体形「よな」が用いられている。

る。単語の活用などの理解と文章の構成や展開の理解を、相互に関連させながら学習を進めることが大切である。

2 基礎的・基本的な言語能力をみようとした問題である。

- 問1 基本的な漢字の読み書きの力をみる問題である。(3)の「焦がれる」は、様々な誤答がみられたほか、無回答も多かった。また(5)の「割く」は、「裂く」もしくは「咲く」と書いたものの、点画が足りないもの、無答のものなど、誤答が多岐に渡っていた。日常生活の中で比較的ふれる機会の多い字でも、語彙として意味を理解するとともに、同音語や同訓語は文脈の中において適切な漢字を判断しながら使用する必要がある。
- 問2 基本的な文法の知識(品詞の分類)についての理解をみる問題で、正答は**助動詞**である。**助詞・動詞・形容詞**とする誤答が多くみられた。国語を正確に理解し適切に表現するために、単語の特徴や使われかたを理解し、活用できるようにしていくことが大切である。
- 問3 熟語についての理解を問う問題である。文脈から「軽率」と「慎重」という反対の意味となる熟語を作り、その際用いない漢字を選ぶ問いで、正答は**イ**の「審」である。熟語を理解する際、類義語や対義語にも目を向け、語彙を広げていく学習が必要である。
- 問4 (1)は話し合いの内容をとらえる力をみる問題である。それぞれの人物の発言が、どのような考えのもとで発せられているのかを判断するものであり、正答は**「勝ち負け」**である。(2)は、話し合いにおける発言について、その役割をとらえる力をみる問題である。傍線部の発言は、「『楽しむ』という言葉を使用した意図を誤解されてしまうかもしれない」という、別の人物による直前の発言を補足するものであり、誤解の具体例と自身の考えた対応策を述べたものである。よって、正答は**ウ**である。(3)は、四字熟語の構成についての理解をみる問題である。基準となる「切磋琢磨」の構成は、似た意味の二字熟語を組み合わせたものとなっており、同じ構成である**エ**「威風堂々」が正答である。

3 説明的な文章を理解する力をみようとした問題である。

- 問1 文章に書かれている内容を正しく読み取り、理解する力をみる問題である。ここでは、傍線部①の前後を照らし合わせて考える。形式段落3は「特別な事情」がない状況を説明している。具体的には、「倫理の問題には、明らかに、答えられるものもある」を受けて、「たとえば、何の特別な事情もないときに、他人に暴力をふるってもよいか、他人のものを取り上げてよいか、他人を監禁して自由を奪ってもよいか、他人の命を奪ってもよいか、などの問題は、すべてノーが正解だと言えるのではないのでしょうか。」と述べている。それをふまえて傍線部①を含む形式段落4を見ると、「たとえば、刑罰という観点から見ると、先ほど挙げたものはいずれも許容される余地があります。」と変化している。この読み取りに合致する選択肢は**ア**である。
- 問2 文章の論理の展開の仕方をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。ここでは、傍線部②を含む形式段落5に着目する。「答えるのが難しいこと」に関しては「数式が長く複雑になれば計算は難しくなるのと同じで、事情が複雑になればなるほど正解を出すことは難しくなります。」とある。また続けて、「計算に入れねばならない事象が増えれば増えるほど、証明の完成は遠のきます。」とある。これらを受けた上で「しかし、だからといって、そのために答えがなくなるわけではありません。」と筆者は述べている。つまり、事情が複雑になることで「答えることは難しくなる」が、それは「正解の有無」には関連がないということである。この読み取りに合致する選択肢は**エ**である。多かった誤答は**イ**だが、資料文中には「倫理学者の能力」について述べた箇所はないため、適切ではない。
- 問3 文章の構成や論理に注意して内容を理解し、適切に表現する力をみる問題である。ここでは、傍線部③を含む形式段落11の内容に着目する。形式段落11の内容を整理すると、次のようになる。

物理法則 (I)	最初からあるもの	世界がどれだけ変わっても、これからもあり続けるもの
倫理のルール (II)	誰かが作った決まりごと	社会や文化が変われば、いつかは変わってしまうかもしれないもの

以上を、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問4 文章全体と部分との関係をとらえ、内容を正確に理解する力をみる問題である。傍線部④を含む形式段落15に着目する。「存在論なんてどうでもいい、と考える人々」の考え方は、直後に法学における法律を例にあげて説明されている。それぞれをまとめると、次のようになる。

論 題	対立する考え方		現実での働き
倫理の正解	誰かが作ったものではなく、最初からあるので世界がどれだけ変わっても、これからもあり続ける	誰かが作った決まりごとであり、社会や文化が変われば、いつかは変わってしまうかもしれないもの	今の私たちの行動を左右する
法学における法律	法律とは不変の法を具現化したものだと考える立場	人々が一から作り上げたものだと考える立場	裁判の場面では何はともあれ国会で定められた法律に則って裁定は下される

となる。つまり、「法学における法律が、考え方の対立はあるにしても、現実的には裁判の場面において裁定を下す」ことと、「倫理の正解が、考え方の対立はあるにしても、現実的には今の私たちの行動を左右している」ことの類似性をふまえ、結果として従わなければならないのであれば、倫理の正解が存在するかしないかはどうでもいい、というのが「存在論なんてどうでもいい、と考える人々」の考え方である。この読み取りに合致する選択肢はイである。多かつた誤答はウであるが、ウの選択肢の中盤に「この世界には予めの正解がどこにも存在しない以上、」とあるが、「予めの正解がどこにも存在しない」と断じた箇所は資料文中にはない。

問5 文章の論理の展開の仕方をとらえ、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。ここでは、傍線部⑤を含む形式段落16以降の内容に着目する。形式段落16には、「仮に倫理の正解が誰かが作った人工物だとすれば、いったい誰が作ったのか、そしてその誰かが作ったものになぜこの私が従わねばならないのか、従わない人をどう扱えばいいのか、という問題が生じる」とある。その上で、形式段落18では「誰かが作ったものについては、気に入らない場合、それに従わずに、変更を加えたり、新しいものを作ったりしたって構わないはずですよ。……昔の人が作った倫理も現代という時代にあっていないなら、作り直した方がいいかもしれません。」と述べている。つまり、倫理の正解が、物理法則と同様に「存在する」ものであれば逆らうことはできないが、誰かが作った人工物であるならば、時代に合わせて変更した方がいいかもしれない、ということになる。したがって、倫理の正解の在り方、つまり「倫理の存在論」を論じることは重要な問題であるというのが筆者の主張である。以上を、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

4 古典を理解する基本的な力をみようとした問題である。

問1 文章に書かれている内容を、叙述に基づいて的確にとらえる力をみる問題である。「誰に」については、傍線部①を含むかぎ括弧の直前に、「野をまもる者ありけるに、召して」とあることから、天智天皇が命じた相手は「野をまもる者」であるとわかる。また、傍線部①を含むかぎ括弧内に「御鷹うせにたり」とあることや、その後の野をまもる者が「御鷹は、かの岡の松のほつえに、南にむきて、しか侍る。」と御鷹の所在について答えていることから、「御鷹を探すこと」が命じられた内容であると判断することができる。

問2 場面や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解する力をみる問題である。資料文は、天智天皇と野をまもる者のやりとりの場面であり、傍線部②までの会話を整理すると、次のようになる。

天智天皇	「御鷹うせにたり、たしかにもとめよ。」
野をまもる者	「御鷹は、かの岡の松のほつえに、南にむきて、しか侍る。」
天智天皇	「そもそもなんぢ、地にむかひて、……②ほかを見る事なし。」

傍線部②の主語は「なんぢ」であるが、これは天皇が野をまもる者への発言であることから、正答はエと判断できる。

問3 歴史的仮名遣いについての理解をみる問題である。正答は「こずえにいたる」である。多かった誤答は、「ず」を「づ」に改めてしまったものや、「ゐ」を「あ」や「み」と改めてしまったものであった。文語のきまりを正確に理解するとともに、古文を音読し、古典特有のリズムを味わいながら古典の世界に親しむことが大切である。

問4 古典に表れたものの見方や考え方をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。各選択肢の正誤判定には資料文全体の内容理解が必要となる。文章後半の野守のおきな言葉に着目すると、「しばのうへにたまれる水を、かがみとして、……そのかがみをまぼりて、御鷹の木居を知れり。」の部分で、ウの選択肢「水たまりに映しだされた様子から、御鷹が止まっている場所を知った。」と合致しており、正答であると判断できる。多かった誤答はエだが、資料文には「野の中にたまりける水を、野守のかがみとはいふなり」とあることから、「野守のおきな」が「野守のかがみ」と呼ばれるとした説明は、適切ではない。

5 資料から読み取ったことをもとに、「コミュニケーションを図るときに気をつけること」についての自分の考えを、構成を工夫しながら、自らの体験をふまえて書く力をみようとした問題である。資料は、文化庁の令和2年度「国語に関する世論調査」における「気になる言葉」の項目より作成したものである。減点となった例としては、資料から読み取ったことだけを書き、自分の体験をふまえた考えが書かれていないものや、読み取ったことと自分の考えが関連していないといった、条件を満たしていないものが多かった。また、誤字・脱字や接続詞・助詞の誤用、言葉の使い方の間違いなども多くみられた。資料から情報を正確に読み取り、目的に応じて相手に伝わる文章を書くことができるように普段から意識して学習する必要がある。